

本年度は当初の研究計画にしがたい、肉食行為をよりマクロな視点で考えることをねらった研究会を実施してきた。前年度前半まではローカルな社会の中で肉食行為がはたしてきた生態学的、社会的機能について人類学を中心に考える機会を得てきた。本年度はそれらの民族誌的事実を相対化させることによって、個別的な事象の記述にとどめず、地域をこえた議論や他の分野からの視点や考え方を組み込んでいくことを期待したからである。具体的には、1) 比較の視点、2) グローバル社会の中での状況、の2つを意識した構成を試みた。1) では、肉食と非肉食との対比や肉食行為の通文化的な共通性をとらえることをねらい、2) では、今を生きる我々の肉食行為に直結した話題が提供されることを期待した。

肉食行為に性差はあるのか

比較の視点は、昨年度の研究会から連続した話題でもある。人間の肉食行為に関わる民族誌事例をとりあげながら、肉食の正当化や忌避に関わる生理学的、文化的背景を個別に考えてきた。肉食の忌避は人類学では宗教や信仰と関連させて論じることが多い。一方で、心理学的なアプローチは肉食忌避には共通した要因があることを再認識させた。たとえばジェンダーと肉食行為との関係である。

大森美香（お茶の水女子大学）が紹介したいいくつかの先行研究では、近年の肉食の忌避は女性に多く、アメリカ合衆国の「ベジタリアン」も女性の比率が高いことが示されていた。逆に男性は肉食行為について肯定的な態度、立場をとる傾向があり、女性の社会進出や権利の主張に圧迫された覇権的男性性を復権させたいという思惑がこうした現象と少なからず関わっていることが、この十数年の間に論じられてきたという。こうした議論そのものもジェンダー観の変化との関係で興味深いのだが、それ以上にこの研究会にとって重要なのは、性差と肉食行為との関係を実証的に考えることである。そこで、議論の俎上にあがったのが、肉食の嗜好や正当化が男性性（masculinity）とどのような関係をもつかということを検証し

たユニークな内容をもつ、「真の男はキッシュを食べない」という論文であった（Rothgerber 2013）。アメリカ合衆国の大学生（「白人」が被験者の88%を占める）を対象にした限定的な調査ではあるが、男性性が肉食の正当化に少なからず寄与していることが定量的に検証された結果は示唆的であった（表）。

比較の視点を広げたところでは、肉食行為について避けて通れない人肉食（カニバリズム）の課題についても報告を得た。山田仁史（東北大学大学院）は文献資料の広範囲な渉猟をもとに、カニバリズムがどのようにとらえられてきたかについての見通しを与えた。カニバリズム研究には事例の集成と分類、視点の転換と混乱、そして食人論の形成といった大きな流れがあるという。そのうえで、食人習俗をオリエンタリズムの産物であると片付けたり、その反駁としての行為の否定にとどまらず、事実としてのカニバリズムをとらえなおす必要があると論じた。

この時の議論で興味深かったのは人間の定義の問題である。共食いの忌避、すなわち同種を食することが禁じられても、食する対象が同種と認められない場合には、当事者にとってはカニバリズムには相当しないのではないかという疑問が呈された。対象を自己と同種のものかどうかを判断し、対応を決めるという点においてこれはある種のレイシズムである。なんらかの価値観が作用し、食の可否について種差別を行っているのである。また、生命活動を伴わない肉体（いわゆる死体）には、物質性はあるものの、人間性や生前の個が存在しうるか否かも考えていく必要があるだろう。人肉食を生態学的にとらえるのか文化的にとらえるのかによって解釈は大きく異なるのである。

日常の食卓と肉食

グローバル時代の肉食行為を考えるための議論は経済学と獣医疫学分野を中心に行った。人類学はそのフィールドを地域社会に求めてきたが、もはやグローバル経済から孤立し

表 肉食正当化と性差 Rothgerber (2013) による肉食の正当化に性差 (Gender) がみられるかどうかを検証した調査結果の一部 (大森が要約し研究会で発表)。

肉食の正当化	内容	性別	性別 (男性性の影響を除く操作後)	
肉食嗜好	肉の味が好きであり、肉を食べないことは考えられないという理由からの正当化	M > F	M > F	男性のほうが女性より肉食を嗜好している。男性性の影響を除いても変わらない。
否認	屠殺や加工の際、動物が苦痛を感じるものではないので食べてもかまわないという正当化	M > F	M > F	男性の方がより強い。男性性の影響を除いても男性の方が動物の痛みを否認する傾向が強い。
乖離	肉は動物と別物とすることによる正当化	M < F	M < F	女性の方がより強い。男性性の影響を除いても女性の方が、肉を動物とは別物として考える傾向が強い。
回避	屠殺など肉ができる過程があるためにおこる正当化	M < F	M < F	女性のほうが、屠殺などの過程があるために肉食を正当化する傾向が強い。これは、男性性を除いても変わらない。
階層	人間は食物連鎖の頂点にたっている所以他の動物を食べてもかまわないという正当化	M > F	n.s.	男性に強く見られるが、男性性の影響を除くと、性差は無くなる。
宗教	肉食が神の意志であるという理由による正当化	M > F	n.s.	男性の方が宗教上の理由による正当化の傾向があるが、男性性を除くと性差はなくなる。
健康	肉食は身体的健康によいという理由による正当化	M > F	n.s.	男性の方が正当化する傾向があるが、男性性を除くと性差はなくなる。
人間の運命	そもそも人間とは、肉食をするものだという理由による正当化	M > F	n.s.	男性の方が正当化する傾向があるが、男性性を除くと性差はなくなる。

M：男性、F：女性、n.s. は統計的有意差なし。

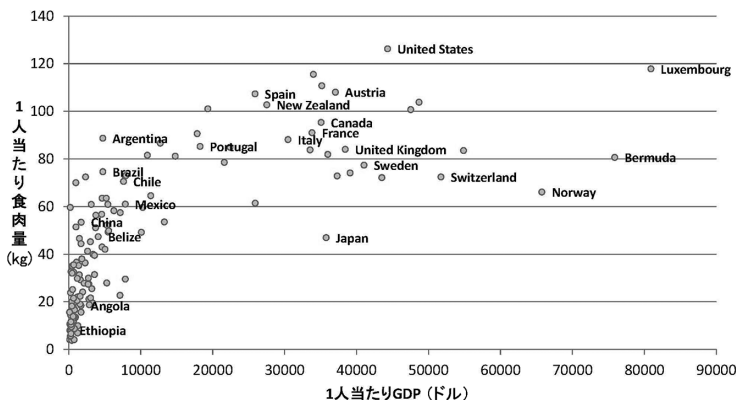


図 2005年における所得水準と食肉量 (小川が研究会において作成、提示)。

た社会は存在しないだろうし、我々がおかれている現代社会の未来を展望する研究が求められているのは言うまでもない。

小川光(名古屋大学大学院)の発表はFAO(国際連合食糧農業機関)が公式に発表している報告書にもとづいた分析を、専門外のメンバーにもわかりやすく説明するものであった。世界規模の統計データにもとづく分析結果については、ミクロナシアからの疑問が少なからず投げかけられたものの、肉食行為の行方を考えるうえでかなり重要な論点を示された。とりわけ、肉食増加の要因、すなわち、なぜ(一人当たりの)肉食量は増えるのかという設問に対して、①都市化、②所得上昇、③価格の安定的推移という回答が具体的なデータで可視化されたこと(図)、食肉生産の拡大要因について、①投入財(飼料)価格の安定、②技術革新(ビジネスモデル・貯蔵技術)、③規模の効率性の追求といったグローバル経済の動向が反映された説明がなされたことは、これまでの研究発表を相対化していくうえでの的をえたものであった。そして、発表の締めくくりに小川自身が示した、将来必要となる肉量の予測(2050年)には、参加した研究会のメンバー全員が興味深々で見入ることになった。その結果は、今のところは研究会のメンバーが特権的に知るにとどめさせていただき、一般の公開は成果刊行論集を期待していただきたい。

筒井俊之(農研機構動物衛生研究所)は小川の発表とも少なからぬ関わりをもつ畜産の世界的な動向をふまえながら、食肉の生産と動物疾病との関係を中心とした話題の提供を行った。畜産は、グローバル市場経済のもとで大きく変化しており、特に集約化が進んでいること、その背景には食糧の安全保障や貧困削減といった地球規模での課題があること、環境との関係の改善や家畜の疾病に対して組織的なリスク対応が求められているといった課題が示された。それらを具体的に考えるうえで、鳥インフルエンザやBSE(伝達性牛海綿状脳症)そして口蹄疫についての世界での現状が紹介された。

これらの動物疾病の感染拡大の要因は、生きた家畜や家畜の接触であり、拡がりかたが地域社会における畜産の形態に大きく影響されるという。2007年に鳥インフルエンザの発生が報告されたミャンマーでは、鳥そのものは過密な状況では飼育されていないものの、生鳥市場、すなわち、鳥を生きた状態で売買する状況が感染拡大を促してしまった可能性が指摘されている。生鳥市場は、冷蔵流通といった社会インフラの確立が容易ではない国の経済状況が反映したシステムである。

ミャンマーをはじめとする水田稲作地帯では、水田雑草や水生昆虫を餌にして、アヒルやカモといった家禽を飼育する

方法が伝統的に継承されてきた。鶏肉の需要と供給の増加によって生鳥市場が拡大されれば、発生したとしても地域内である程度限定されてきた動物疾患の感染が、外部に向かって広がっていく可能性が生じる。地域をこえた生鳥の流通は、感染個体をそれぞれの社会で飼われている個体群にとりいれてしまうことになる。動物疾病がエピソードからパンデミックにその規模を拡大させていくこと背景には、やはりグローバル経済のもとで肉食が増加していくことがあることをあらためて認識させられた。

鳥インフルエンザ以上に畜産に深刻な問題を与えるのが口蹄疫である。口蹄疫のウィルスが分離されたのは19世紀の終わりで、もっとも初期に発見されたものの一つである。口蹄疫の特徴は複数の種(キリンやゾウも感染する)にまたがって感染し、ウィルスの変異が早く、感染力が強いことである。家畜のかかる動物疾病としてはきわめて深刻なものであるが、口蹄疫そのものはワクチンの投与によって発症を抑えることができる。一方で、ワクチンを使うと感染個体とその症状を示しにくくなり、感染に気づかないまま出荷や売却等による移動で感染が拡大してしまう恐れがある。ワクチン清浄国(ワクチンを使用し、感染個体の殺処分を行わないで感染を収束させた国)には、感染個体が潜在している可能性があるため、非ワクチン清浄国ではワクチン清浄国からの食肉の輸入等は制限されている。これもグローバル市場経済のもとで食肉が流通しているからこそ生じる現象である。

生き物と食肉の狭間で

本共同研究ではメンバーによる発表や討論に並行させて、問題意識を共有するための実見も行ってきた。本年度は先進国の食肉の生産、流通のシステムについて参加者でともに考えるために食肉工場の見学を計画し、感染症対策をはじめとする衛生管理や、近年、特に重視されている動物の福祉が配慮された環境の中で食肉が生産されていく過程を見学することができた。興味深かったのは、複数の参加者が異口同音に、皮と蹄がはずされることによって、目の前で加工されている対象が動物ではなくなるような感覚をもったと話したことがある。皮と蹄は外界と動物体との接触面であり境界となっている部位である。視覚的に生き物の存在を示しているのかもしれない。対象の生を、人間はどのように認識しているのだろうか。研究会の議論をまとめていくうえでの大きな課題になりそうである。

【参考文献】

- Rothgerber, Hank 2013. Real men don't eat (vegetable) quiche: Masculinity and the justification of meat consumption. *Psychology of Men & Masculinity* 14(4): 363-375.
- 野林厚志 2014 「口蹄疫のパンデミック」『月刊みんぱく』11: 6-7.

のばやし あつし

国立民族学博物館文化資源研究センター教授。専門は人類学、民族考古学、人間と動物との関係史。主な調査地は台湾。著書に『タイワンインシシを追う』(臨川書店 2014年)『イノシシ狩猟の民族考古学』(御茶の水書房 2008年)。主編著に『台湾原住民研究の射程』(2014年 順益台湾原住民博物館)等。